

詩人シェリーの百年忌

イギリスの詩人シェリー(Percy Bysshe Shelley) はイタリアの海で死んだが、今年は丸々百年である。彼の抒情詩人としての名誉は、はやくも彼の『西風の歌』と『百の霊へ』などの名篇とともに、あまねく世界に伝わり、中国でも多くの人知っているから、重ねて述べる必要はあるまい。いまはただ彼の社会思想の面について少し述べよう。

シェリーは一七九二年に生まれ、大学にいたころに、『無神論の必要』と題する、五ページの論文を刊行し、当局に憎まれ、退学の処分を受けた。また妹の同級生と自由結婚をし、家庭にも容れられなかった。その後彼らは感情のもつれから、またまた離別し、シェリーはそこで哲学的無政府主義者のゴドウィン(Godwin) の娘メアリと結婚し、イタリアに寄寓し、多くの詩曲を作った。一八二二年七月八日友人と船を浮かべ、風に遇って沈没し、十八日になって死体が見つかり、ポケットにギリシアのソフォクレスの悲劇とキーツの詩集があったので、シェリーと知れ、その場で火葬に付された。

シェリーはイギリス十九世紀前半の数少ない革命詩人であり、バイロン(Byron) と併称されたが、その間には次のような違いがある。バイロンの革命は破壊的であり、目的はおのれ一人の自由を妨害する実際の障害を除去することにあつた。シェリーは建設的で、理性に適った想像の社会を提示することにあつた。彼はゴドウィンの弟子であるから、彼の詩の中の社会思想は大半がゴドウィンの哲学的無政府主義である。ゴドウィンは『政治的正義の研究』でごく簡単な共同生活を主張した。現在の述語の分類では、無政府的共産主義と言えるが、彼は性善を主張し、また理性と勧誘説諭の力を信じたから、極力暴力に反対し、無抵抗の感化を実現の手段とした。シェリーの心の最大の情熱は人生の苦悪を洗い流すことにあつた（『全集』のシェリー夫人の序文による）。これは実に彼が全身全霊を込めて灌注したところである。彼は政治的な自由を人類の幸福をなし遂げる直接の動力源と考えたから、一つの自由の新しい希望が生まれるたびに、つねに彼は非常な喜びを感じ、個人の利益よりも特に甚だしかった。しかし彼はこのような強烈な情熱を持っていたとはいえ、その天性と学説の影響によって、直接には政治的な運動をやらず、その精力を全て文芸に注いだ。彼の思想は、二篇の長詩に明らかである。その一は「イスラムの反抗」で、ラアンとキトナ二人の身を以てその主義に殉じたことを記している。彼らはもっぱら平和的な勧誘説諭の方法によって被支配者を決起させて暴君を追い払う。反動が回復するに及んで、敵は彼らを捉えるが、相変わらず無抵抗で死に就く。彼らは失敗したけれども、こうした精神は失敗し得ず、いつか必ず勝利の時が来ることを確信している。彼は篇中でラアンが暴君に迫り、侍臣が皆逃げることが言う。

一人やや勇敢なのが、刀を挙げて、
この見知らぬ客を刺そうとした。“可哀想な人よ、
君はわたしに何をするのか？”——落ち着いて、荘重で断乎としていた、
この声はその筋力を緩め、彼は投げ捨てた
その刀を地上に、恐怖で色を失った、

そして言葉もなく坐り込んだ。

ゴドウィン『政治的正義』の中でよく似た事を記していて、兵士がマリウスの獄舎に入って来て彼を殺そうとした時、彼は言った、“大将、君はマリウスを殺すほど腹が据わっているか？”兵士はそれを聞いて愕然として、手を下す勇気をなくした。つまり同一の思想である。その二は『解放されたプロメシュウス』で、ギリシアのアイスキュロス(Aischylos) 三部作の『束縛されたプロメシュウス』に続いて作られ、古代神話の材料を借りて彼の哲学を寄せたものである。プロメシュウスは人類のために太陽から火を盗み、ゼウス（すなわちローマのユピテル）の怒りに触れて、コーカサスの山に縛られ、さまざまな苦刑を受ける。古代伝説はその妃が運命の秘密をゼウスに告げ、それで解放されたと言う。しかしシェリーは、人類の戦士が人類の圧迫者と妥協するのは、教訓にもならないと考えて、旧説を改変して、ゼウスは結局ドモゴルガンに倒され、プロメシュウスがまた自由を得て、そこで黄金世界が始まる、とした。第三幕の末に云う。

嫌悪すべき仮面は落ちた、
人はすべて笏を持たず、自由で、拘束がない、
ただただ相等しい人である、階級に別れず、部落はなく、国家さえもない、
怖れと崇拜と平等とから去って、
自分の王であり、正直で、穏やかにして聡明である。

女性の情況については、また次のように云う。

以前には思いつきもしなかった智慧を口にし、
以前には恐ろしくて感じる勇気もなかった感情を眼にし、
身は以前にはなろうともしなかった人になる、
彼女たちはいまこの地上を正に天上のようにした。

第四幕の末のドモゴルガンの言葉の一節は、つまりこの目的に達する道であり、またシェリーの人生哲学の精義でもある。

“希望”を忍受することを無限の苦難とし、
死あるいは夜よりももっと暗い悔しさを許し、
反抗するのは万能の“強権”のようだ。
愛しかつ引き受け、希望し続け、
“希望”が彼自身の難船から彼が沈思したものを創り出すまで、
改変はいらない、躊躇はいらない、後悔もいらない。
これこそ君の光栄である、
善であり、大いにして愉楽、美にして自由、
ただこれのみが生命、愉楽、皇国と勝利である。

彼の無抵抗の反抗主義は、『無政府の仮面』で最もはっきりと述べられている。第八十五六節などに云う。

両手を込めて、視線を定め、
恐れることはない、驚くことはむろんない、

彼らの殺人を見ながら、
彼らの怒気が収まるまで。
その時彼らは恥じて去るであろう、
彼らが出てきたところへ、
そしてこうして流れた鮮血は、
彼らの赤くなった頬に現れるであろう。

このように純朴で敬虔な連句は、ほとんどブレイク(Blake)の筆かと疑わせる。この思想を、わたしは無抵抗の反抗主義と呼ぶ。なぜなら彼は暴力の抵抗を主張せず、相変わらず理性的な反抗を求めるから。これがすなわち一切の革命的精神の本源である。かれにはまだ『イギリス人に与える』という詩があつて、意味はさらに激烈である。

わたしはこの一文を書いて、偏重を免れないようだが、決して別の一面を見過ごしているわけではない。彼は結局は詩人の詩人であることを認めるが、彼の社会思想についてはまだほとんど言及した人がない。だから特にくさり述べたのである。社会問題と文芸の関係は、シェリー自身『解放されたプロメシュウス』の序で最もうまく言っているから、いま一節を抄訳する。

“ある人はわたしが自分の詩篇をもつぱら直接に改革を鼓吹するために作っていると思うかもしれないし、あるいはそれを人生理論の全体系を含んでいると見なすかもしれないが、いずれも間違っている。教訓詩はわたしの嫌悪するものである。およそ散文の中でのようにはっきりと説明することのできるものは、詩では退屈でかつ余計な事でないものはない。わたしの目的はただ……読者の精錬された想像がほぼ道徳的価値を有する美の理想と接することである。人間の心が愛することができ、感服し、信頼し、希望しそして忍耐することができるようにならない限りは、道徳行為の理論はただ人生の大通りに撒かれた種に過ぎず、知覚しない行人がそれらの種を踏みつけて塵土にしてしまう、それらの種はその幸福の果実を結ぶであろうにもかかわらず。そのことに人々が気づくことである。”ここから社会問題から階級意識に到るまですべて文芸に取り込むことができることが分かる。ただもつぱら手段の用として、文芸の自由と生命を失いさえしなければ、よいのである。シェリー自身がまさにこのような理想の人であった。いまはしばらく彼が晩年に作った小詩を一首引いて、結末の例としよう。

挽歌

あまりに切迫した悲しみは、もう歌にはならない、
大声で悲嘆している烈風よ。
沈鬱な雲がまさに夜を徹して
吊いの鐘を衝く時の狂風よ。
涙は虚しい悲哀の嵐、
枝を伸ばした裸の樹、
深い岩窟と荒涼たる平野よ、——
すべて哭き悲しめ、かの人の世の鬱屈のために！

※初出：1922年7月18日『晨报副刊』